

古今倭歌集巻第一

春歌上

ふるとしにはるたちける日よめる

ありはらのもととかた

としのうちはるはきにけりひと

とせをこそとやいはむこととやいはむ

古今倭歌集巻第五

秋歌下

ふれささののみさせいつわうふあさや
ふむや

ふむやのあさや

ふれささののみさせいつわうふあさや
ふむや

ふれささののみさせいつわうふあさや

ふれささののみさせいつわうふあさや

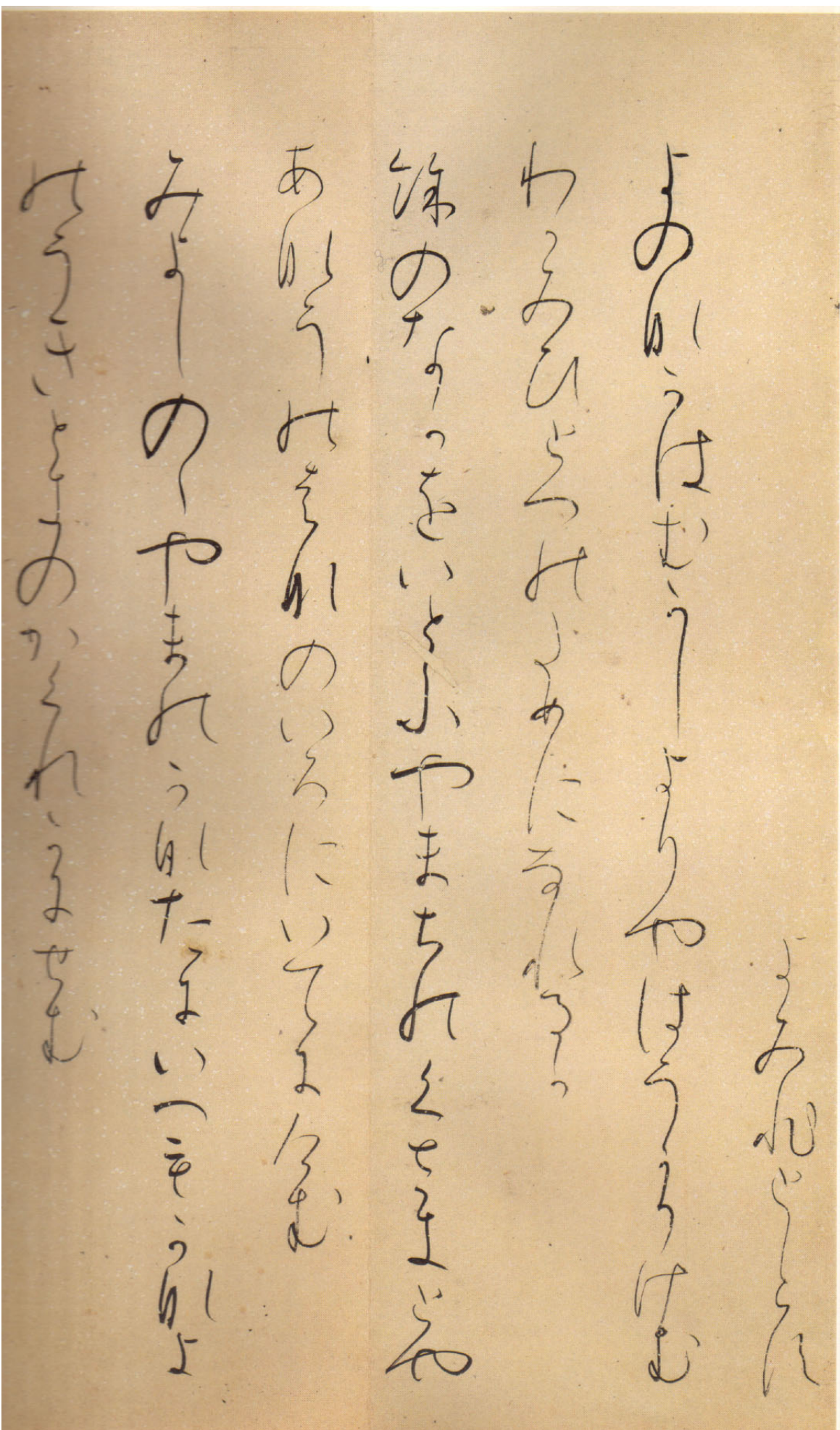
古今倭歌集巻第五

秋歌下

これさだのみこのいへのうたあはせ
によめる

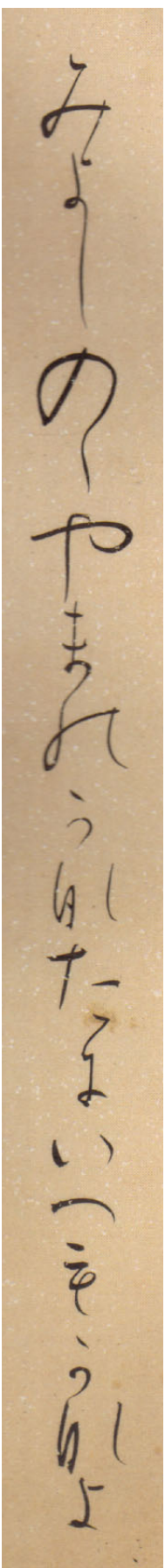
ふむやのあさや

ふくからにあきのくさきのしをるれば
むべやまかせをあらしてふらむ

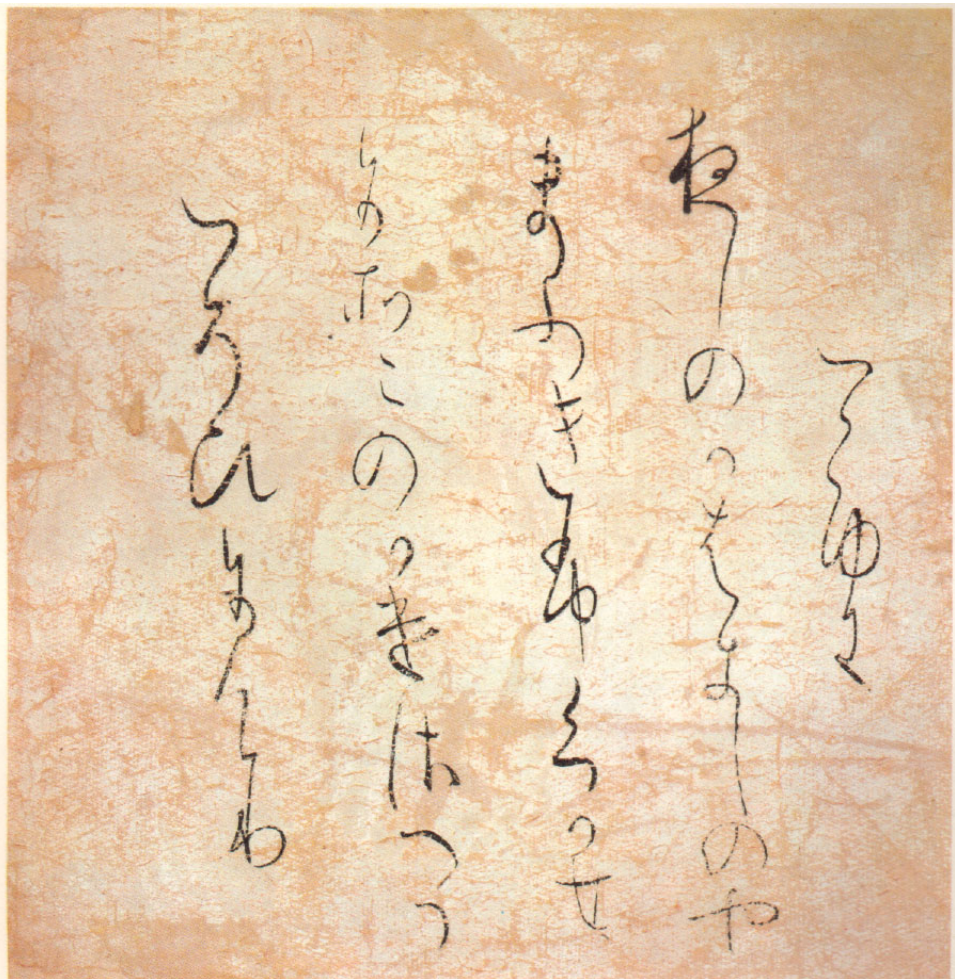


よみびとしらず

よのなかはむかしよりやはうかりけむ
わがみひとつのためになれるか
よのなかをいとふやまぢのくさきとや
あなうのはなのいろにいでにけむ
みよしのゝやまのかなたにいへもがな
よのうきときのかくれがにせむ



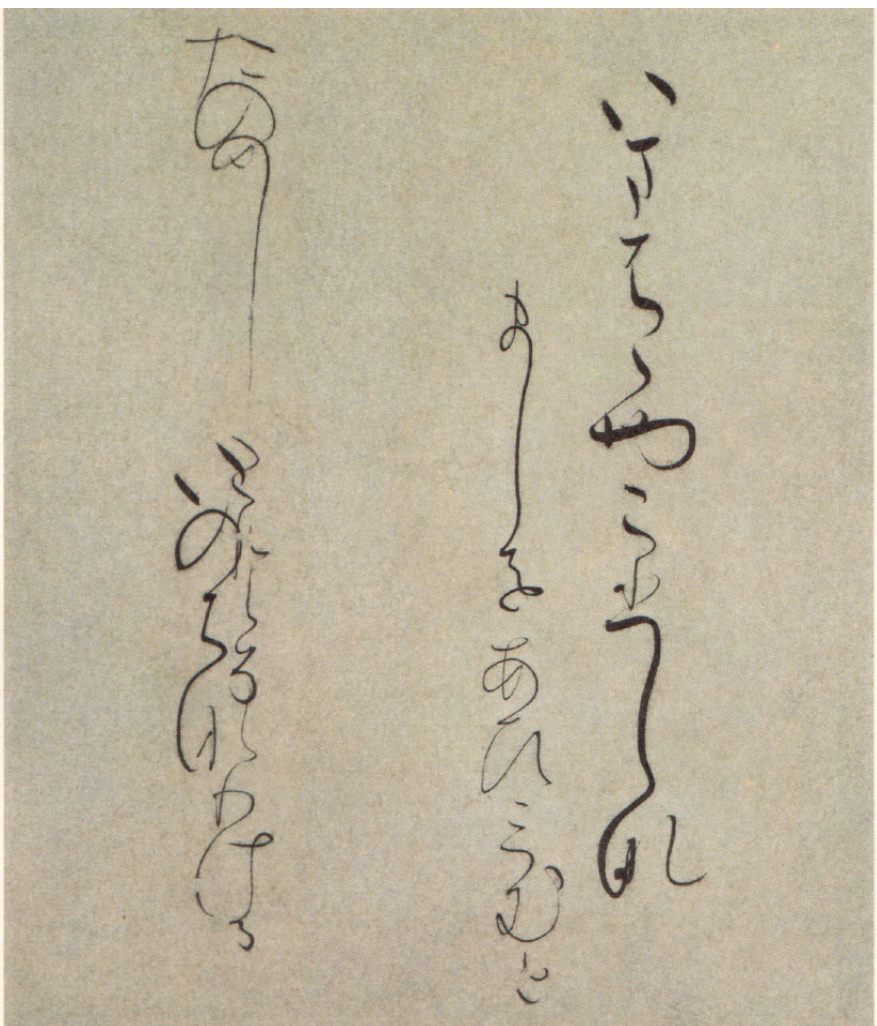
図版 4 寸松庵色紙 伝紀貫之



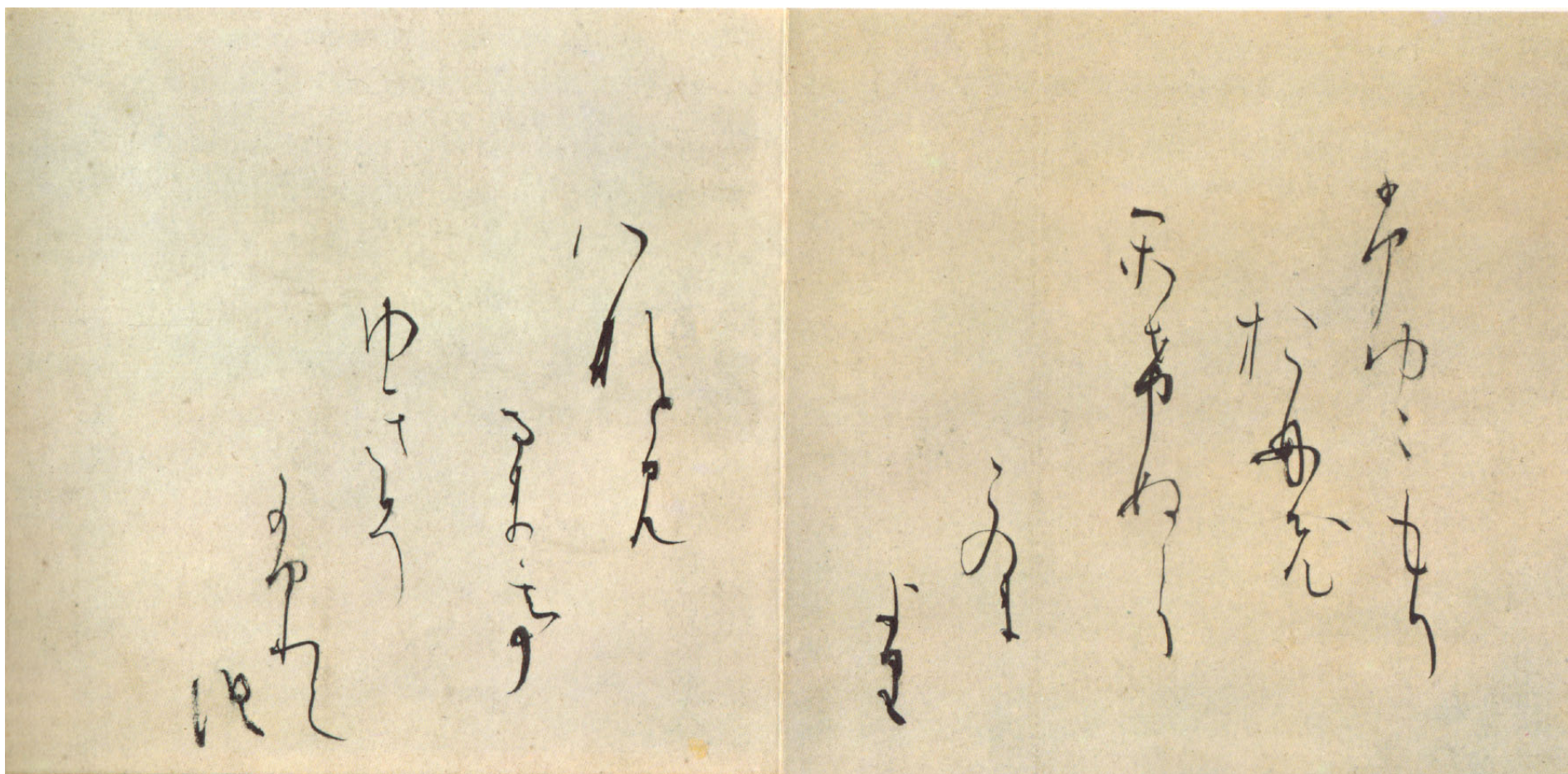
つらゆき
よしのがはきしのや
まぶきふくかぜ
にそこのかげさへう
つろひにけり



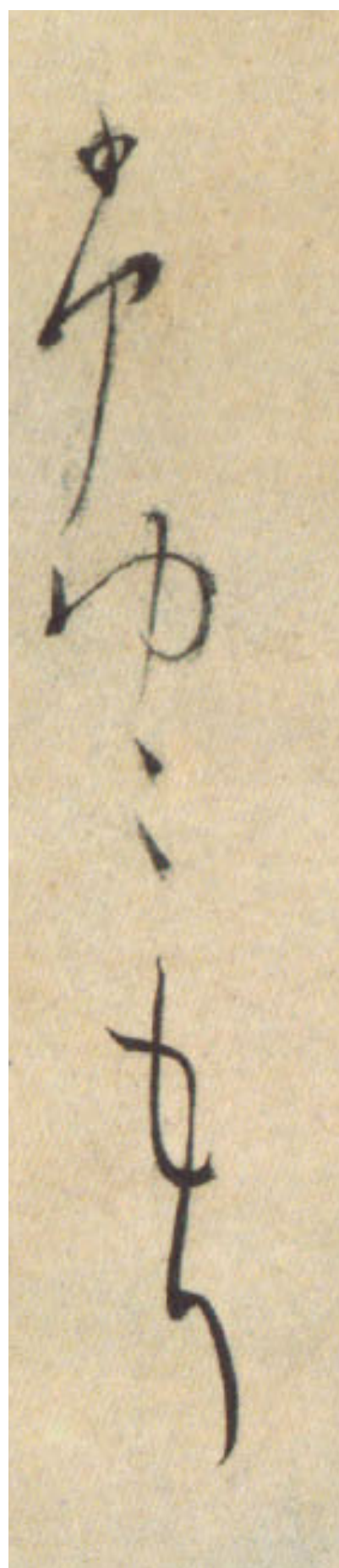
図版 5 升色紙 伝藤原行成

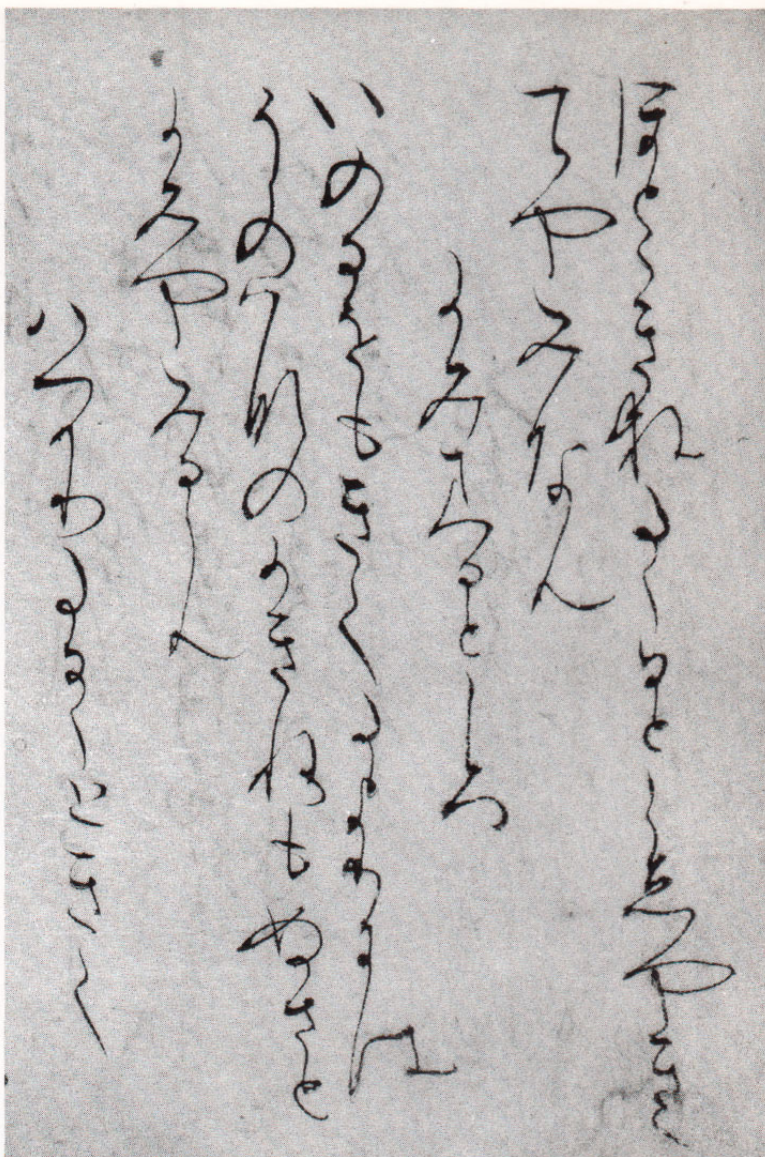


いまはゝやこひしな
ましをあひみむと
たのめしことぞ
いのちなりける



ふゆこもり
おもひ
かけぬを
このま
より
はれとみ
るまで
ゆきぞ
ふりし
く





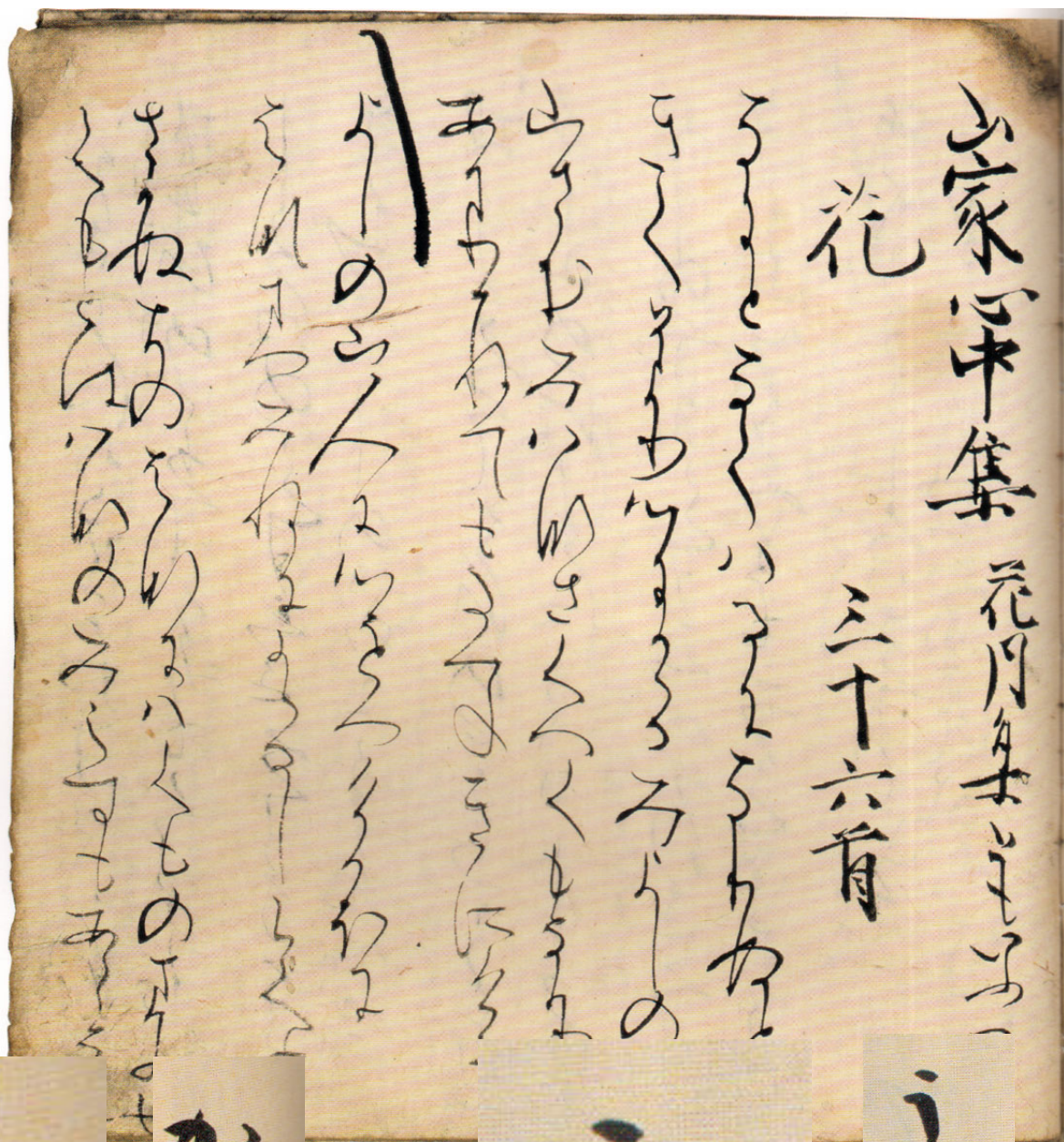
ほととぎすたゞひとひさやき
てやみなん

かみまつるところ

いのるをもきくたよりには
うのはなのかきねもぬさと
かみやみるらん

はつかりたびとときく





山家心中集 花月集といふべし

花 三十六首

なにとなくはるになりぬと

きく日より心にかゝるみよしの山

山さむみはなさくべくもなかりけり

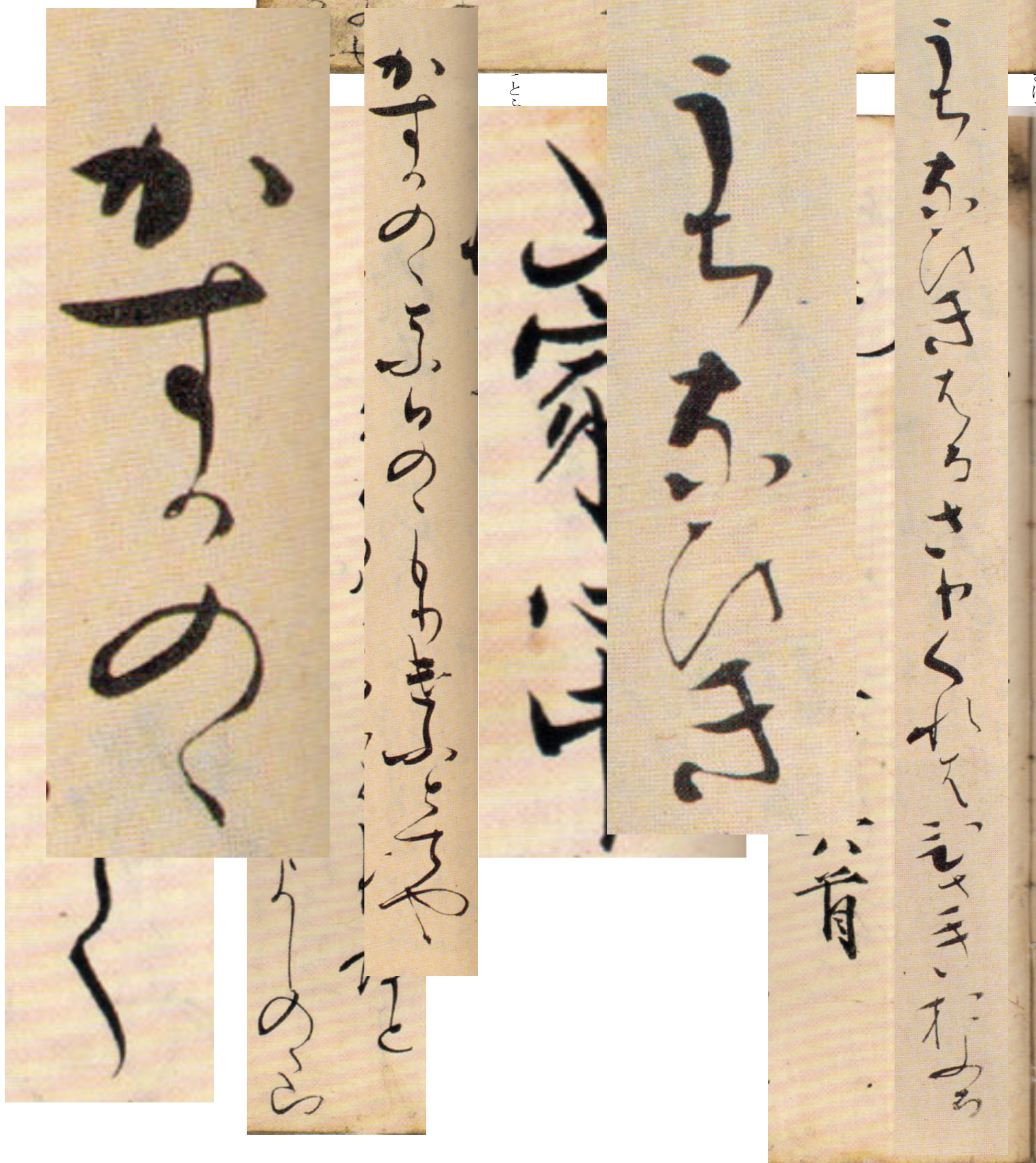
あまりかねてもたづねきにける

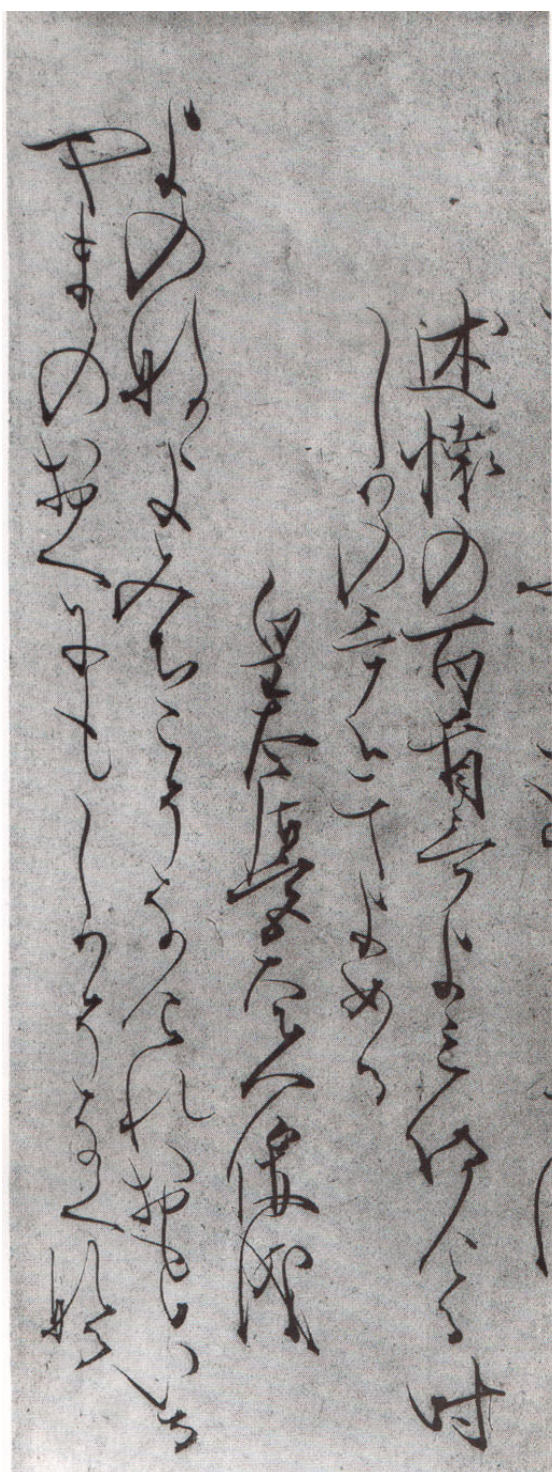
よしの山人に心をつけがほに

はなまつみねにかゝるしらくも

さかぬまのはなにはくものまがふとも

くもとははなのみえずもあらなむ

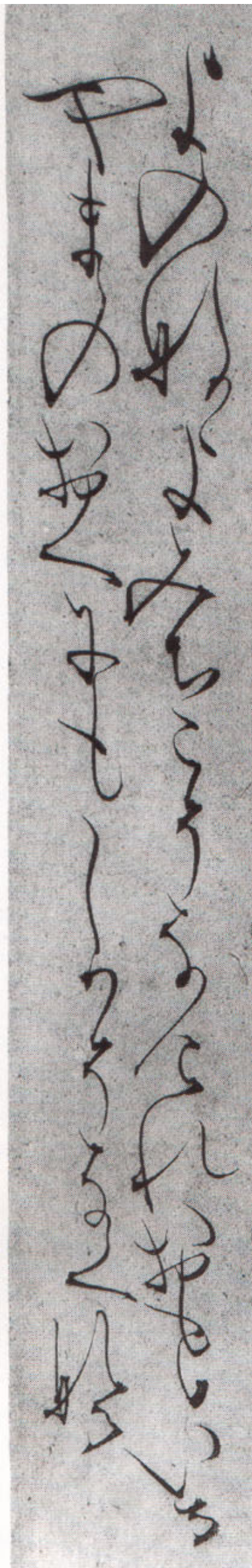


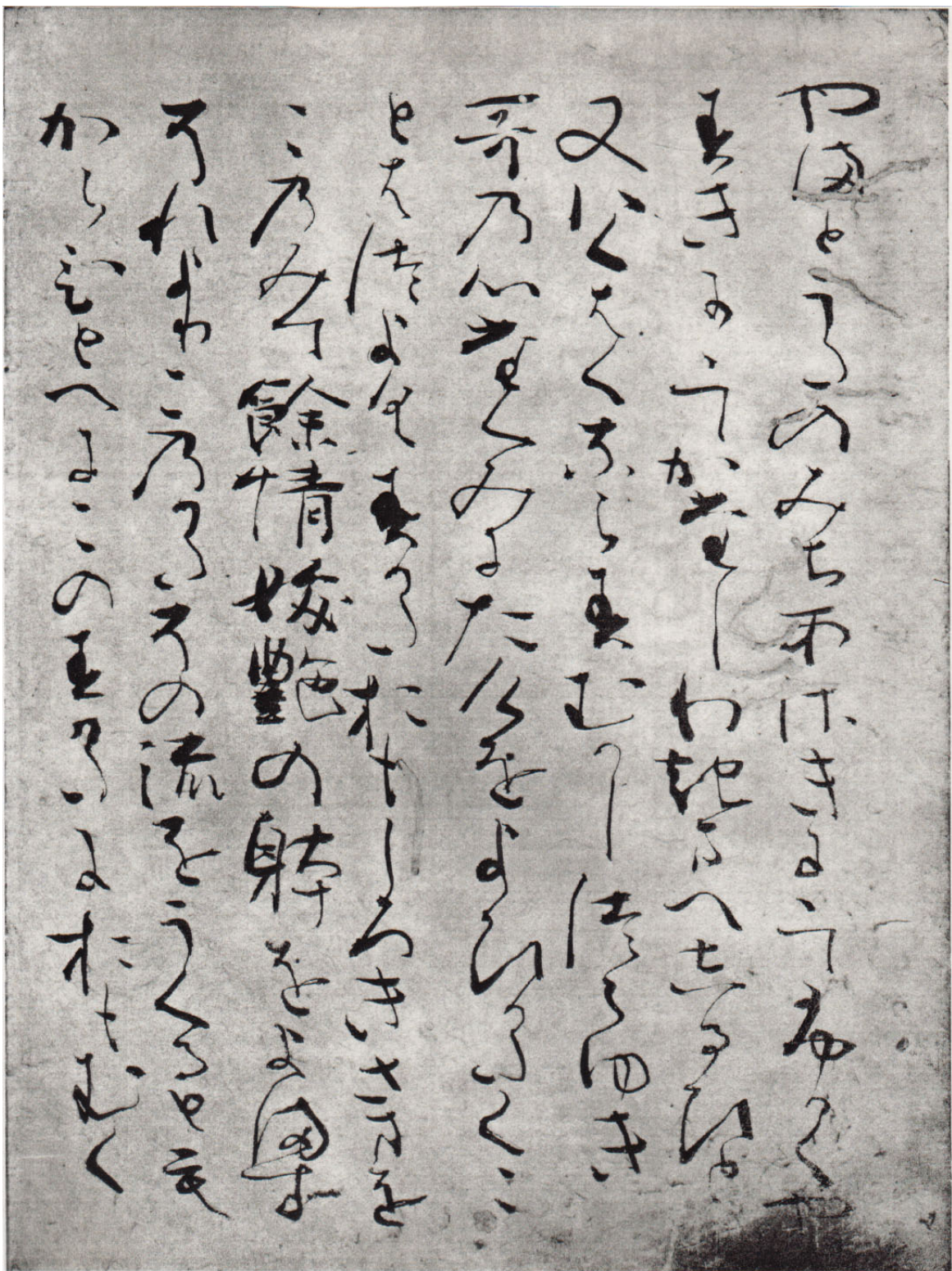


述懐の百首哥よみ侍りける時
しかの哥とてよめる

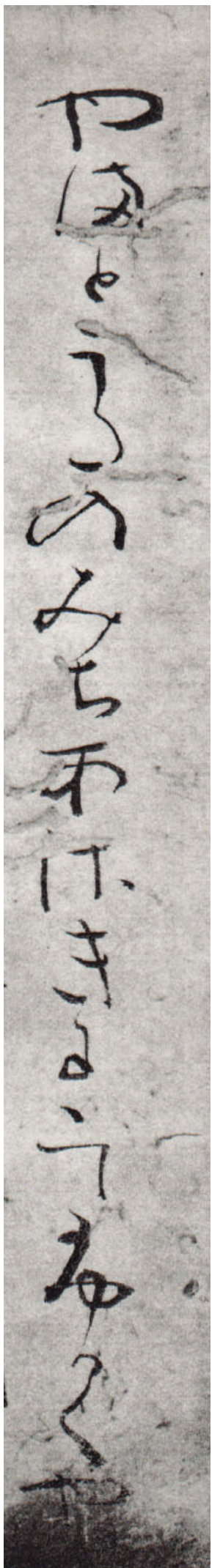
皇太后宮大夫俊成

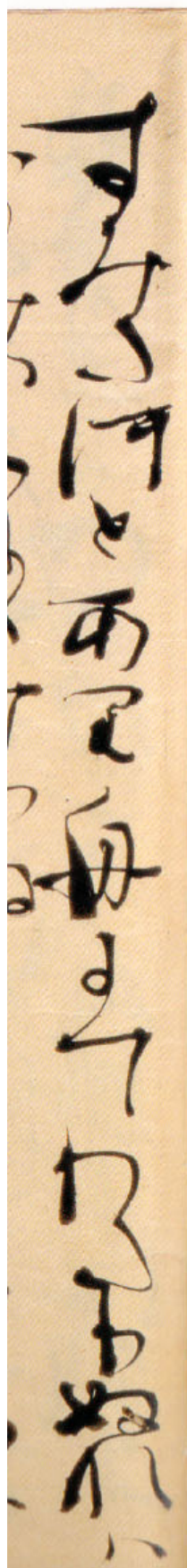
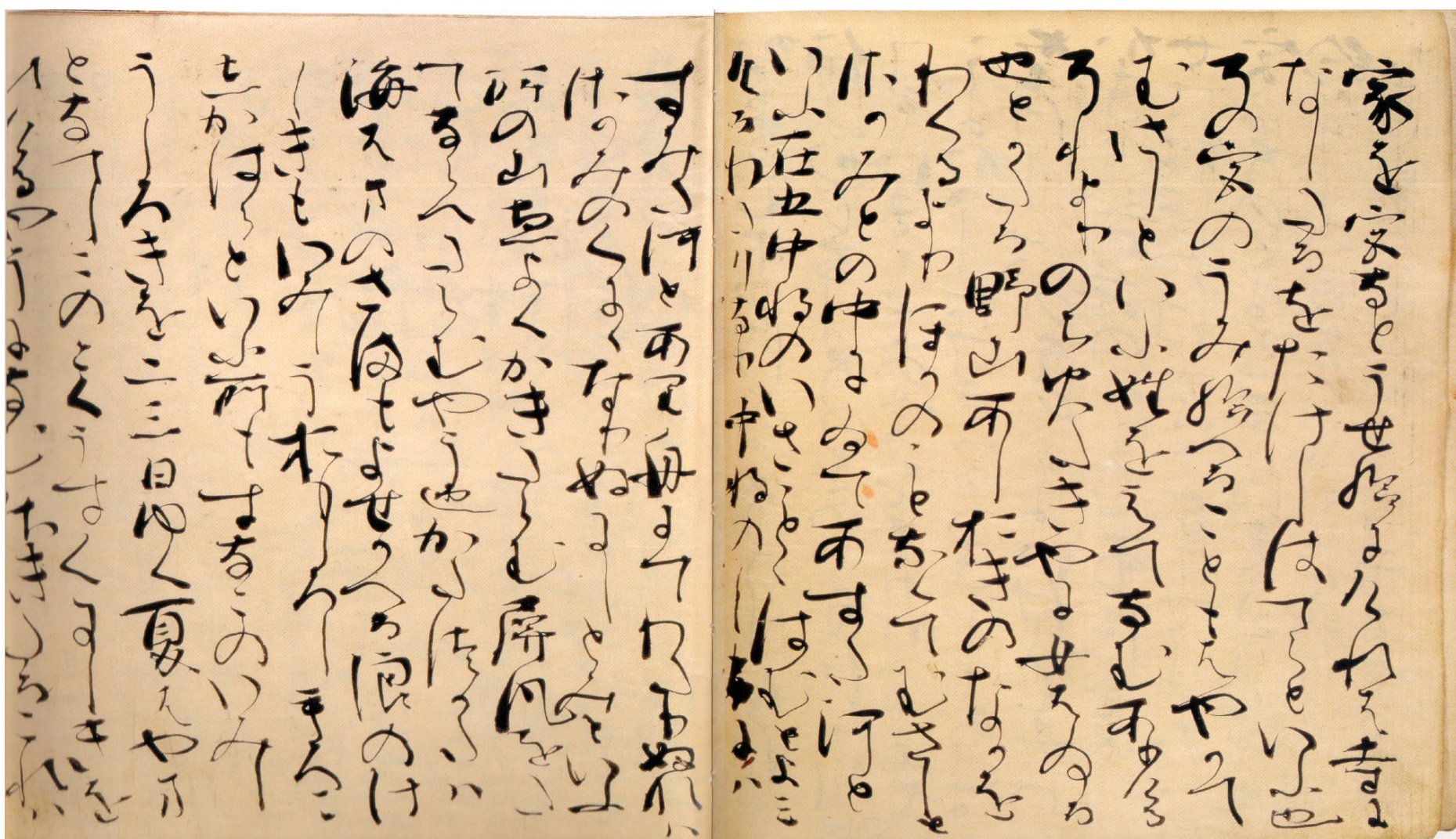
よのなかよみちこそなけれおもひいる
やまのおくにもしかぞなくなる



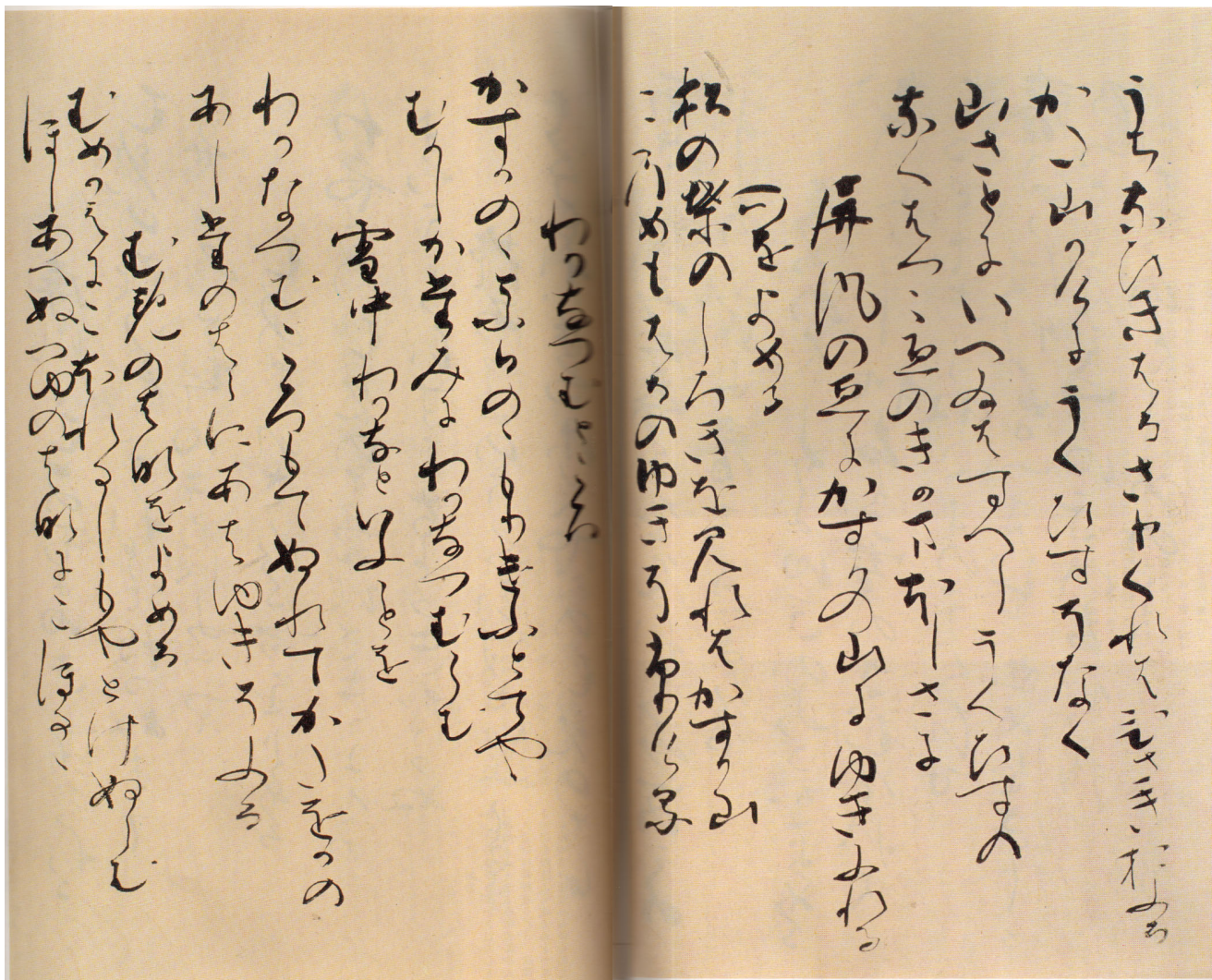


やまとうたのみち、あさきにゝてふかく、や
すきにゝてかたし。わきまへしるひと、
又いくばくならず。むかし、つらゆき、
歌の心のたくみに、たけをよびがたく、こ
とばつよく、すがたおもしろきさまを
このみて、餘情妖艶の跡をよまず。
それよりこのかた、その流をうくるとも
がら、ひとへにこのすがたにおもむく。





すみだ河とあり、舟にてわたりぬれば、
さがみのくにゝなりぬ。にしとみといふ
所の山、忽よとかきたらむ屏風をた
てならべたらむやう也。かたつかたは



うちなひきはるなりくれはひさきおふる



かすかのふらののモチキミナカキ

